

冷凍人間ノ夢

カラダハ 海洋ニ 溶ケコンデ
ココロハ 重力ヲ 断チキツテ
ソウ ハルカナ昔
高速回転シテイル 時空カラ
ボクノ眠ル寝台ハ 隔離シタ

永遠 旅 明ルイ星

不安や哀シミハ過去ノ藻屑トナツテ
銀ノカプセルヲ穩ヤカニ満タスモノ

希望 闇 仄カナ命

父サン母サンアナタノ許ヘハドレ位
運命ヲ歪メサセレバ辿リツケルノカ

未ダ 脳 抱ク覚醒

モウ一度 緑ノ芝 踏ミシメテ
柔ラカナ 陽射シ 身ニアビテ

争イ絶エヌ世界ヲ 脱ケ出シ
痛ミモ震エモ涙モ 果テタ今

カラダハ 浸ル 死ノ香ルスウプニ
ココロハ 蠢ク 生ヲ封ジタ缶詰デ

大切ダッタ ボクノ

名前ハ年齢ハ性別ハ生年月日ハ血液型ハ出身地ハ住所ハ肩書キハ趣味ヤ特技ハ眼ノ色ハ
薄ッペラナ 金属片

サヨウナラ

駆ケ抜ケタ 遠イ影

太陽モ月光モ灯火モ水辺モ木立モ金色モ土煙モ春ノ朝モ夏ノ真昼モ秋ノ夕ベモ冬ノ夜モ
イツマデモ 忘レヌ

深海 音 昔ノ記憶

いつか真夜中の台所で見た
白い 冷蔵庫が

低く長い響きを発していた

空腹のあまり 扉を開けると

そこにはなぜか スウプの素と蓋の開いた缶詰

そして 血汐にまみれた胎児があつて

本当は ボクは浴室に行くべきだった

気がつくと手に 掴んだスプーンとフォークで

口内を汚染し 胃に欲を詰め

ロ ロ ロ ロ . . . と泣いていた

ロ ロ ロ ロ ロ ロ ロ ロ ロ ロ

コ コ コ コ

ロ ロ ロ ロ ロ ロ ロ ロ ロ

ロ コ ロ ロ ロ . . . と冷蔵庫が鳴いた

北埜ユリコ

第5回「文芸思潮」
現代詩賞
当選



きたの ゆりこ

1986年生まれ 大阪芸術大学美術学科卒業後、図書館でのアルバイトを細々としている。

自称「半ニート」。

好きな詩人は、谷川俊太郎、吉野弘、(歌手→) 椎名林檎、谷山浩子

好きな画家は、ルネ・マグリット、ジョン・エヴァレット・ミレイ、ヴィルヘルム・ハンマースホイ、石田徹也、(絵本作家→) ジミー〈幾米〉

ロロロロロ ロロロロロ・・・と喚くと

ロ ロ ロロロロ・・・長く 冷蔵庫は呻きだした

ロロロロロ ロロロロロ

コ コ コ

ロロロロロロロ ロロ

コ コ コ

コ コ コロコ ココロコロコロコロコロコロコロコロ

ロ ロ ロ

ロ ロ ロ ロ ロ

○ ロ ロ ロ

ロ ロ コ ロ ロ ロ ロ

ロ ロ ロ ロ コ・・・突然 冷蔵庫は呻きを停め

・・・ボクは黙った

宇宙が狭マル 未来も過去も

今二重ナリ

徐々ニ老イテユク 世界

銀ノ胎内デ

殺ガレタ感情デ単調ナ詩ヲツムグ以外ノスベヲ知ラナイ

未ダ孤独ニ

慣レテイナカタ ボク

「救^{タス}ケテクレ」

父サン母サン 早く逢イタイ

終末 現 ア・・・

受賞の言葉

北埜ユリ

今回が初めて投稿ですが、このような栄えある賞を戴けたことに大きな驚きと、それに勝る感謝の念を痛感しています。この場を借りて審査してくださった方々、関係者の方々に厚くお礼を申し上げます。出品させていただいた三作品はいずれも、拙いながらも、北埜らしい感情の混沌と昇華を描ききれた作品になっていると思います。「未来と云う闇へのバクゼンとした不安」、「社会に對してまったく無力な自分」という目の前の現実が根底にあって生まれた作品と言えるでしょう。

いつか現状の自分と理想の自分との距離だけ積み上げられていた、健気なプライドがゆっくりと、年月をかけて崩れ落ちることを始めたときから、起きながらにして不穏な夢を不意に見るようになりました。ほぼ同時期に、詩を書くことを覚えたように思います。夢の内容はたいてい異常なものが多く、例えばそれは、盛る炎に融けんとする骨身であったり、瓦礫あるいは水圧が押し潰していく心肺の呻きであったり、ぎらつく殺意の切っ先で裂くあるいは裂かれる白い息の根などであったりするのですが、かようなおぞましい幻想を垣間見て意識が覚めるたびに、「今日もこうして自分が平和に過ごしていられるのは本当に尊いことなのだ」と、ひしひし、感じるのです。

何物に関しても、すっかりミジンコになってしまっていた哀れな自尊心を今回の受賞が励ましてくれているので、御座なりになって拗ねている「本当は絵を描きたい自分」を揺り起こしてみようと思いました。素晴らしすぎる機を、有難うございました。

幼い時代に

手を引かれて歩いた長い影の並ぶ

真夏の匂い立ちこめる散歩道

ふとボクは顔をあげて

あれは何？と指さした

蒼く暗く上空が渦巻いていた

何だったのか分からぬ感覚だけが

留まる残像

淡い 炎

このココロは カラダは

限りなく○に 近づいて

生まれ変わる 時を待つ

透明ナ固体トナツテ

深イ夢ノ底ヘト

撓^{シム}ンデ湮ム

タクサン泳イデ疲レタノカ
ヒドイ塩素臭ニ酔ッタノカ
全テガ曖昧ニ溺レテシマウ
ボクハ気泡ダラケノ構成物
無呼吸睡眠中ノ奇形魚ノ息
紺碧ノ水底デフフツト湧キ
薄青ノ水面ヘツツト昇リ
明ルイ虚空ヘツフト消エル
ボクノカラダハ生命以前ヘ
遡上シココロハ星カラ星ヘ

第6回 文芸思潮 現代詩賞 作品募集

文芸思潮では、清新な詩作品を募集します。志操が荒廃し、言葉の真の力が失われつつある現在、日本語の奥底に流れる感情の根を洗い、美しい言葉として表現の結晶体に高める文芸の営為は、今こそ再興されねばなりません。言葉の芯をなす強靱な詩精神を鍛え、人の心の底に響き、永くそこで生き続ける言魂の作品を期待します。

作品募集要項

主旨●真の言葉の力に溢れた詩作品を賞揚し、詩の創作エネルギーを顕彰する。由来や伝統に根差しつつ、現代に造形する、美しい日本語によって、言語の精神エネルギーの復活をめざす。また埋もれた才能や作品を掘り起こし、広く社会に知らせ、作品を世に残すことによって、日本文学の興隆に寄与する。

募集内容●オリジナルの詩作品。ただしこれまで同人雑誌に発表したものを改作したものも可。一人3篇までに限る(3篇の場合まとめて送付のこと/添付別紙は全体に対して1枚のみでよい)。

応募資格

※今回より恐縮ですが応募審査料1000円を御協力くださいますようお願い申し上げます。

応募規定

一篇は400字詰原稿用紙5枚以内(原稿用紙使用の場合は必ずA4原稿用紙を使用のこと。B4は失格)。今年度より応募審査料1000円を郵便為替などで同封のこと。ワープロ原稿はA4用紙を罫線なしで横に使い40字×30行で印字。必ず閉じること。別紙に①応募部門(2010年度第6回現代詩賞応募作品と明記のこと)②タイトル③本名およびペンネーム④年齢・生年月日(年齢・生年月日のないものは失格とする)⑤〒(郵便番号は必ず明記のこと/ないものは失格)住所⑥電話番号⑦職業・略歴⑧400字詰換算原稿枚数を記したものを添付。これらを厳守しない場合は失格とする。⑨応募審査料1000円を郵便為替などで同封。外国からは11USドル。※応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取ったうえで送付のこと(コピー送付が望ましい)。

応募先●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

「文芸思潮」現代詩賞 係

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848 E-mail asiawave@qk9.so-net.ne.jp

賞●文芸思潮現代詩賞■賞状・トロフィー・賞金10万円(2名の場合は5万円)

優秀賞■賞状・賞メダル・賞金3万円

奨励賞■賞状・賞メダル 入選■賞状・記念品

選考委員●池田康・五十嵐勉(他の選考委員が加わることもあり)

締切●2010年5月31日(当日消印有効)

発表●1次予選通過作品は2010年9月末発売の「文芸思潮」37号に発表。

受賞発表・作品掲載は11月末発売の38号、およびインターネットに発表掲載。優秀作・奨励賞なども順次「文芸思潮」に掲載する。

主催●文芸思潮

※主催者から 痛切な心の叫び、天を射抜く鮮烈な言葉、水晶のように輝く言葉の結晶、流麗な音韻の調べ、言魂^{ことだま}の響きを期待しています。

解き放て！

青い空へと

眠る幼虫は
その殻の外できらめく闇の向こう
安息の季節を告げる蝶となり
温かな手のひら求め
羽ばたきを終えても
永い月日を照らす花を咲かせ
壊れた戦車の上で命を謳歌しよう

浅緑の意識へ 上昇する

赤い嘘は絶え 真の愛が
子宮を満たす 夢となる

還元サレテ音モ無ク

悪夢ハヤガテ光ニ

果テシノ有ル

ボク ハ 冷凍人間

永遠 旅 夢ヲミル

静寂 死 抱ク生命

重力ニ抱カレ永遠ヲ旅スル

母ア
——七十三の齡、母を偲ぶ——

福地順一

母ア 俺七十三ネなたネ
元氣良ぐしてよ

母ア 俺母アの事、何も覚えてねエンだネ
顔コも声コも覚えてねエンだ
写真コも見だ事ねエンだ

母ア 母ア、俺三つの時
俺と離れだんだってのオ

急性の流行性脳膜炎で
伊東病院の隔離病棟サ入らえだんだってのオ
その時母ア泣き叫んだべアなア
出して呉へってよオ
其処ア如何したんだ部屋だべなア
鉄格子嵌てだんだがア

母ア 母ア、俺四つの時
其処で亡くなったんだってのオ
誰ネも看取られなくてのオ

その時母ア俺の名前コ呼んだべアなア
一人息子の俺の名前ばよオ

母ア 母アの声、それでも俺の耳サ残てねエンだネ

母ア 俺七十三ネなた
元氣良ぐしてよ

何も覚えてねエンだ
情ねエ息子だと思てるンでねべがなア
それでも俺、母アの亡くなった時の事
何時も氣ネ掛けでるンだネ
この七十過ぎだ今でも氣ネ掛けでるンだネ
あの一年、何ンほ切ねがったべアなアと思てるンだネ



ふくち じゅんいち

1936 年青森県弘前に生まれる。
1959 年弘前大学文理学部文学科卒業。
後、東奥義塾高校（弘前）、函館中部高校、札幌
南高校、函館東高校、札幌拓北高校など教員生活
38 年。
1997 年定年退職。
後、札幌予備学院講師（漢文）を7年。
元『弘前詩会』『民主文学』『葦牙』『原始林』会員。
現『近代日本文学会』会員。
著書 『杜甫・李白・白楽天—その詩と生涯—』（鳥
影社）、『風塵記』（日東印刷株式会社）他。

遠工処で

第5回「文芸思潮」
現代詩賞
当選

受賞の言葉

福地順一

最優秀賞受賞の由、ありがとうございました。それも、
編集部の方から、提出した三編いずれも最優秀賞に値す
ると言われ驚いております。

若い時に詩を書いたりしてはいましたが、その頃の詩
人と言われる人たちの詩に観念的独善的な傾向のものが
多く（今でもそうですが……）、興味を失っていました。

それが昨年の暮れ、どういいうわけか急に、津軽弁で
詩を書きたくなり、物の怪に取り憑かれたようになって
七十編ほどを書きあげました。「母ア」「遠工処で」はそ
の中から生まれてきたものです。どちらも事実に基づい
て書いたものです。

また一方で、歌謡詩（歌謡歌詞と言うべきか）も書い
ておりました。こちらの方は二十編ほどになりました。「
息子よ」もその中で生まれたものです。この閉塞感の強
い時代にあつて、現代の若者への激励を込めて書いたつ
もりです。

現代詩とは何かも分からず、ただ、方言詩二編、歌謡
詩一編を応募しましたが、それがいずれも現代詩として
いい評価をいただいたようで、驚いております。感動です。
感謝です。

今、手もとにある詩を編んで一冊の詩集とし、世に問
うてみたいと思っております。

現代詩賞受賞はそのひとつの契機ともなりました。あ
りがとうございました。

田んぼア黄色ぐなてまで
そろそろ稲刈りだという日
如何したんだが俺
他人の田んぼササがど入て行て
学生服ばぶん投げで
稲ば敷布団ネして
大の字ネなて
寝で居だ
顔サ被さた稲の穂の向こうサ
真青だ空展がつて居だ
風も何も無工静かアな日であた
心底静かアな日であた
誰だが
遠工遠工処で泣えでだネ

耳塚

夢と現の狭間に
星中の囁きが反響する
無数のアンテナがサポートする聴覚の
暴力的なまでに高められた感覚は
遙か海の果てに零れたあえかな呻きすら
聞き洩らすことができない
毛布をかぶって固く目を瞑っても
裏腹に耳は次々と言葉を拾ってくる
応える術などありはしないのに
テレビのコードは抜いてある
新聞もラジオもケータイも
まとめて屑籠に放り込んだ
ヘッドフォン・スピーカーで耳を蔽い
闇雲にギターを掻き鳴らしても
締め出せない
見知らぬ誰かの叫びが途絶えることなく
聞こえる 聞こえる
聞こえる
痛みはわたしのものではない
けれど確実にわたしは擦り減っている
耳聴くなればなるほど

第5回「文芸思潮」
現代詩賞
優秀賞

二条千河



にじょう せんか

北海道札幌市出身。
2005年、詩集『赤壁が燃える日—現代詩「三国志」—』を上梓。
同年よりHP「二条河原の落書」<http://www.h7.dion.ne.jp/~nijo/>にて、作品の公開や創作活動報告を行っている。

受賞の言葉 二条千河

見ざる、言わざる、聞かざる。高名なる賢猿たちに諭されるまでもなく、耳目を塞ぎ口を閉ざして生きていけるなら、さぞかし心安らかな暮らしが送れるに違いない。

けれど世に氾濫する言葉は、指の間をこじ開けるようにして身体の中に押し入ってくる。身体の奥に隠してきた言葉を引きずり出し、白日にさらそうとする。いや、何より、聞くこと語ることを自ら渴望する耳や口の食欲を、手のひら二つではとても覆いきれないのだ。猿ほど賢くはない人の定め、と思えば諦めもつくだろうか。

このたび、拙作を優秀賞にご選出いただき、こうして皆さまの御目にかける機会を賜った。自分の口からあふれた言葉が誰かの耳目を汚すことへの恐れ——しかし同時に、一人でも多くの方にご覧いただきたい、ご感想を頂戴したいと思ってしまう欲深さ。猿への進化の道は、なかなか遠いようだ。

わたしたちの心は
鈍らなくてはならないのだ
コメントを求められるなら
脊髓反射で片づけるべきなのだ
考えられるかぎり最小限の犠牲 といって
せいぜい詩が書けなくなる程度のことではないか
それを拒むとしたら
あとはこの耳を切り落とすよりほかにない
巨大な電波塔の下に
そうして耳塚が築かれる
夢と現の狭間に
その幻像は堆く聳え立ち
ついに 自らの呼吸音すら届かない
底なしの静謐に沈む肢体を錯覚する
束の間の安息
葬り去った耳にはただ無言で手を合わせ
ひとまず朝まではこのまま
唄も語りもない世界に
わたしは眠ることにする
貪婪な耳たちは
それでもまだ何かを聞き続けることを欲して
今夜も芳一を
墨黒の闇に誘い込むのか

—わたしの酒瓶は近頃隆起する
鳥の奥儀に通じているのだろうか—

I

ラザニアのはずが
マカロニを皿に盛る

時は不思議を纏うから
背後の凝視をねじ伏せる
のらくら者のピラミッド
ぐずぐず頂にとりかかる

東西南北に結婚しよう
前や後は子供らに預けて
重ねるようには愛せずに
そいつの端をひっぱって
(電子レンジの加熱で伸びた、あのだらしのないラップのようにではなく)
のばして、くるり、一周の
袋になって交わった

熟れた柿の炎は親密に
厚手の鍋肌を滑りゆく
分かち合うのは
くつくつ煮えるラザニアで
とろとろ煮える愛だった

夢の続きの塩梅で
素敵な皿に横たわる
僕は思わずむさぼった

茜色の果てに息をのむ
抜け殻の君を見た
メビウス状の僕がいる

マカロニになったのか
僕は一人になったのか

II

バランス感覚

バジルやルッコラ、香菜の類を
レタスやキャベツのように
むしゃむしゃ食べる
この自然を自由に走らせる
人々はこれを罵り
素直になるということはなんて複雑

III

あたしのうどん

秘密をひとつうちあげましょう
ガムを噛んでいるあたし
汗をながしたうどん職人

ぎざぎざの歯のリズム
上顎のまな板に
麺棒の舌は首ったけ
お湯は勝手に沸き上がり
湯あがり蒸気は上機嫌

とってもおいしいのよ

あなたに食べさせてあげられない
涙まじりのあたしのうどん

第5回「文芸思潮」
現代詩賞
優秀賞

ゆきすとりふ

香ばしい人々は食べられる言葉で会話する

VII

ミルフィーユの帰結

パイ生地のなかでとけきれない
ごつごつバターの反骨で
むきだしなまま、困惑させる
お馴染みのあなたの温室のなかなら
難なく馴染んで滑らかになる

一紫苑の明けに
ワインの酔いは顔を出し
今か今かとうちふるえていたのは
グラスの方で
鳥の奥儀に通じていたわたしの酒瓶は
旅立ちの時を迎えていた―

IV

きみのみつ

きみの蜜は
赤まじりの瑪瑙のような黄金色
燻した小枝のような焦げ茶色
その香は
高貴なアールグレイ
快活なアカシア
舐めてしまうには末恐ろしく
唇にそっと、塗りこめる
きみの蜜を
息を殺して秘密にする

休憩

焦げついた神殿のような
餃子の褓を交えてご歓談

V

策略はカプチーノ

ミルクの泡にあたしを抱かせた
あなたのカプチーノ
シナモンは靴音を鳴らし
気ままなフラメンコに夢中
何も知らずに飲み干した
あなたは何も隠せない

VI

しがないカフェ

夕暮れ序曲の石畳
骨抜きのパール瓶が転がると
男の立ち襟は寒そうに寄り添う
踏みしだく枯れ葉のおやつを食べて
茶色の暖をとろうとするも
葡萄色が煙るほうへ流される

受賞の言葉

ゆきすとしふ

この度は発表の機会を与えていただきましたこと心より感謝致します。
私は批評（主に美術）に対する素朴な問いを明確にするために詩を書き始めました。味わい深い、妙味、といった表現が多用されるのにも関わらず、批評において「味覚」は口を塞がれるべき劣等生です。タブーの申し子「味覚」を問うことは不可能なのでしょうか。
その答えを求め私は戯れに2種類の批評モデルを描いてみました。「ミルフィーユ型批評」と「シュークリーム型批評」です。それぞれパイ生地とシュー生地は客観性や歴史に基づく既存の言説を、クリーム部分は作品を満たす味わいの恋心を示すものとし、前者は幾層にも焼き上がった既存の言説を几帳面に重ね、その間に自らの恋心をあたかも既にその一部であったかのように塗り込みます。香ばしいパイと滑らかなクリームの織りなす隙間なく規則正しい調和は、どの部分を切り分けても一定の味を保証します。これは皿の上に鎮座し、フォークを持つ手によって断面の美しさと共に賞味されることを前提としており、説得力に富んだ優秀な学術論文はこれに相当します。
これに対して後者は己の思考に従い無節操に既存の言説を取り込み、膨らんでいった形そのものを土台にします。内側に不定形のまま詰まった恋心は、手に取り一口齧ったとたんにこぼれ出す厄介さを孕んでいます。とはいえ、はみ出たクリームのみを舐めてみると、また別の味覚が官能的に開花するものです。この賞味の自由度は、シュー皮とクリームの間に残された僅かな隙間にポエジーが潜り込むことによって獲得されるのであり、詩人による頌歌や評論の本質はこれに他ならないのです。
私はどうにも武骨なシュークリームしか焼けないようなので、その基軸である詩を真剣に書くことにしました。味覚に臆せず、媚びず、じっくり酒を酌み交わす心づもりです。私にとって詩とは透明でエロティックな美に至る術への驚嘆を伝える手段なのです。



ゆきすとしふ

1984年1月17日生まれ
2004年9月～2005年10月仏ジャン・ムランリヨン第3大学留学
2006年3月成蹊大学 文学部 国際文化学科卒業
2009年3月武蔵野美術大学大学院 修士課程 造形研究科 美術専攻 芸術文化政策コース修了
埼玉県在住
平成20年度武蔵野美術大学 大学院 芸術文化政策コース修士論文
「自己神話の向こう側 ジャン・コクトー壁画の詩再考」
現代詩手帖 2009年9月号 新人作品 選外佳作「夏の残像たち」

肖像

甥・絢音の誕生日に

中島真悠子

第5回「文芸思潮」
現代詩賞

受賞の言葉

中島真悠子

林檎をかじると
太陽に菌形がつく
小さな吐息が風車をまわす
一方で風は激しく切り裂かれる
蜻蛉を追って草原へかけだす その足音に
ケルトの地が割れる
あやと
爪先は どこか
宇宙の端っこつながっているとみえ
無遠慮に鍵盤を叩くたび
洪水を起こしたり そのあと
小さな花を残したりするのを
あなた自身が盲目となり
あなたのの中の世界に気がつかないが
あるのだ たしかに
月の寂しい光りぐあいを映した湖に
ゼリーみたいない体を抱えて潜った日々や
あらゆる生き物 あらゆる時間 鉱物に至るまで
ひとつの息づかいで星雲をめぐったこと
ただ 生まれたとき
あまりにも大きな声で叫んでしまったので
いまだ小さなその体を開いても
おもちゃ箱のようにには出てこないのだ
あやと

子どもは無垢な存在ととらえられることが一般的ですが、私はそのようには思っていない。子どもなりに打算、計算、嘘もつき、周囲の目の存在を知っているようです。けれどももっと別の次元で、開かれた内部の世界があると思います。目にみえない、広大なその世界も、もとの性質や環境でさまざまでしょう。けれども、はじまりは皆、新鮮で美しい力のはたらくものと思っています。幸い、私の甥はそれなりに恵まれた環境にありますので、肉体的にも精神的にもよい成長をしているようですが、どんな子どもも成長と共に得るものや失うものがあります。白い紙に絵をかけば、それだけ白い城が消えるように。とはいえ、やはり成長することは喜ばしいことです。せめてもの失うものをなにかしらの形で残したいと、人が肖像画を描いたり写真を撮ったりするように、言葉でその世界を描きたいと思い、今回の作品となりました。

私は昔から特に子ども好きというわけではなく、むしろ苦手に感じていました。私より下に兄弟もなかったせいか、また甥と叔母という遠すぎず近すぎない血縁関係のせいか、彼の存在を思うとき、自分と全く関係ない他人を思うそっけなさで、姉のような母のような気持ちがかすかにするという、おかしいものです。

そんなおかしい感情の発露として、表現しなかったものを考えると、どんなものより詩という形式が最も適していたと思います。未熟ではありますが、こうして発表の機会を与えていただけたことに、深く感謝いたします。今回はまことにありがとうございました。

あなたを抱きしめると
地平線からなつかしい季節はやってきて
しかし
私の胸を通りぬけていくばかりだ
あなたはそれを虫捕り網なんかで
軽々とつかまえてみせる
ときどきは
にくいよ
あやと

第5回「文芸思潮」
現代詩賞
優秀賞



なかしま まゆこ

1987年6月6日生まれ。千葉県出身。
現在、早稲田大学に在学中。
所属同人誌等なし。
第四回文芸思潮現代詩賞 優秀賞

優秀賞

そのうち
あなたは原始の森や砂漠を忘れ
知らず知らず街をつくりあげるかもしれない
あるときは
あなたの周りの人間が
遠い国や知らない星からやってきたと知り
あなたの街なみは
交遊や略奪のために
せわしなく
窓が作られたり 壊されたりする
群集にキスや石を投げられて
放浪することになったら
朝を枕に 夜を重ねて
ほてった肉体を横たえ 心で不眠を覚える
荒野に眠る旋律
遠い雷鳴や爆音
偉大な音楽にかくされた不協和音

言葉もなく
名前の本当の意味を知るかもしれない
めまぐるしい夢の呟で もし
誰か！ と叫んだなら
すでにあなたは家の中だ
不思議ななつかしい風景は
いつせいに立ち去り
二度と帰らない
あやと
そのとき私はこの一篇の詩
あなたがかつて遊んだ深い森の寂しい湖
その水底で ひっそりと泥にかくれて
黙っただけ
あなたの中に はっきりと到達する
時を刻むことのない太陽

ノット・ア・ライン

木糸ゆさ

はるのあめ ふかく ふかく きいろい
いぬごや 彼女はふと つぶやいた

はるのあめ もえしだく みずたまり きのう そんざいしていたものが
脳のすきまを かいくぐる ねえ ルーシーってば こんなひでも そらのうえ
に ・ いるの やっぱり はるのあめ どこまで
お いかけてくるつもり かびんなんてもっ
てないから、あたし！・・・／あ

こがれるのは それじゃ あ なに
はるのあめ みあげた 服薬ちゅうのそら
むかいのうちの ねこ しなやか しなやか
なうしろすがたの描線を なぞっ て（*手を出してはいけない） はるのあめ
てがみたち が にじみそめ
た にびいろを おとしゆく おと ・ おと ・ ああ ひとり ひとり だ
彼はつぶやいた はるのあめ

きいと ゆさ

1988 年生
山梨県出身
早稲田大学文学部在学

もえしだき もえしだき イヤホンのでんきがとけだす せつな すこぶるぬれ た おむか
いのねこ やめて ・ やめて （ふりむ く ・ ・） はるのあめ
他者 が からだをすりぬる 自己 ふかく ふかく うすべにいろのやねのうえ
すべる ためいき ああわたし もうあしもとが なくなってもいいかしら
やっぱり はるのあめ ひとひた シャワーの温度をかえて にゅうはくしよくのこやのなか
なきながら むじゃきにまってる 多大なほく かびんなんてもってない
から
やめて、

ひとつ なみうつ しつぽのさき くびのすずを ならして
「 」 ことば

はるのあめ

ひとり ひとりし きづかない じぶんがじぶんをおいていく ひ

受賞の言葉

木糸ゆさ

言葉と向き合うこと は、私にとって 自分のなかの核のような
もの と向き合うことであり、とても勇気のいることかつ労力を要
するものである。

できれば打ち遣っておきたいものである。が、しかし、ある瞬間
に「書かなければ！」と思ってしまうのだ。それはおそらく、結局、
私にとっての表現手段は言葉しか存在しないからなのだろう、良く
も悪くも。

そんな厄介な間柄に comma を切ってくれたような思いがけない
受賞でした。ありがとうございます。

第5回「文芸思潮」
現代詩賞
優秀賞

人間鳥コンテスト

福田ゆかり

鳥人間コンテストの前日
人間鳥コンテストが行われた

人間が鳥のようにどれだけ飛べるかを競うのに対し
鳥が人間のようにどれだけ歩けるかを競う

にわとりは朝が待ち遠しくて失格

カラスは途中のゴミ袋に気を取られたので失格

鳩はシャボン玉を探しまわって失格

ふくろうは居眠りをはじめて失格

フラミンゴはここにいたいと言って失格

クジャクはとなりのすずめを驚かせて失格

したがってすずめも失格

必然的に残った

オウムが3位

朱鷺が2位

ダチョウが1位になった

表彰台にならんでも

3匹はなんとなくそわそわしている

翌日の鳥人間コンテストで
人間が涙を流す

3位と2位の

2位と1位の

1位とその上の

段差をも

鳥はみんな一瞬にして

とびこえていった

半紙

泣いてしなしな

怒ってギザギザ

会いたくてひらひら

かなわなくてびりびり

000155のわたしの隣に
したたかな文鎮

第5回「文芸思潮」
現代詩賞
優秀賞



ふくだ ゆかり

1985年、大阪府生まれ。

京都教育大学情報音楽専攻卒業。

書店員として働きながら、詩・音楽・雑貨などを創作し
人生を模索している。

<http://yaplog.jp/cocoro-asobi/>

受賞の言葉

福田ゆかり

この度は、優秀賞に選んでいただき本当にありがとうございます。
この受賞をきっかけに、もっと詩をか
きたい、もっといろいろなものを見つめて生きたいと
思いました。わたしは詩という形態で、「人間」とそ
れを守ってくれている「もの」について世界を広げて
いきたいと思っています。

「鉄火巻リズム」の登場物は、鉄火巻、それを食べ
る人間、そしてカマキリです。この作品を書くにあた
り、まず題名にカマキリを登場させよう、と決め、そ
こから「鉄火巻リズム」という言葉がうまれました。
詩の内容には何の関係もないカマキリですが、彼なし
でこの作品はできませんでした。このような隠れた存
在がわたしは好きです。

「人間鳥コンテスト」は、「段差」をキーワードにか
いた作品です。とにかく鳥をたくさん登場させようと
思い、こんなコンテストがあればおもしろいなと思っ
て書きました。この詩をかきながら、わたしの前世は
鳥だったのではないか、とぼんやり思いました。

「半紙」は、最後に「カナブン」を登場させようと
思いました。それが「したたかな文鎮」です。半紙の
ようなわたし、文鎮のようなあの人、そしてその上を
とぶカナブン、を想像すると世界は滑稽です。

選んでいただいた三編には、たくさんの「もの」を
登場させることができました。わたしとともにその「も
の」たちも賞されたようで、わたしはたくさんの仲間
と喜んでいる気持ちです。

母が舞う

第5回「文芸思潮」
現代詩賞
優秀賞

夜中に目を覚ますと
母が幽霊になって座っていた
母は集合したガス体だが
霧の奥深に
太古の沼をひそませていた
次第に可視化された母の実体は
真赤な長襦袢をけだるく羽織り
裾を血のように引きずると
乳房と腹と性器をどろりと曝け出し
全身を中空に捧げ苛み
左足を軸にくるくる舞い始めた
妊娠管が破れ膣に脈打つ
危うい痙攣で
破裂するまで膨張する
紫に
宇宙創生の羊水が渦を
巻く
小さな裸の人形を
大切に母は胸に抱き
しかしそれは人形ではなく
干からびた赤ん坊の木乃伊だ

江口久路



えぐち ひさみち

10代の終わり頃から「中央文学」に詩を発表。
その後、小説に移行。途中、約15年のブランクを経て、
2004年から活動再開。
小説「鬼の手」で第四回銀華文学賞奨励賞受賞。
劇場勤務。52歳。

受賞の言葉 江口久路

じくじくと膿んだ皮膚に指の腹をそっと押し当て鼓動を確かめる。次第に指先に力を込め、時に小さく爪を立てる。破壊された細胞を爪で掻き出し、取り返しのつかない自身の行く末を予感する。

私にとって、詩作とは、私というものの精神の過程をたどり、そこを何度も巡りながら、中にひそむ言語的欠片を拾い集めて行く一連の作業です。しかし、時として思いがけず私自身を危険な状況におとし入れる恐れもあるため、久しくおこなってはきませんでした。「五条秀敏」という名で詩を発表し始めたのは、まだ二十歳に満たない頃だったと思います。それから数年は詩を書いていたはずですが、あまりに古い話で、いただいた掲載誌もいつの間にか手元から消え去っていました。

やはり当時も、不健康な、死をイメージさせる内容の詩ばかりを書いていたという記憶があります。長い年月を隔てても、自分の立ち位置が変わることはなかったようです。

この度、このような素晴らしい賞をお与えいただいた機会に、また少し、詩のほうも書いてみようかという気持ちになっています。

小説とのバランスを保ちながら、結晶化する言葉をとらえ、それらをうまくつなぎとめることができたなら、これからも詩作を続けて行きたいと思っています。この度は本当にありがとうございます。

死んで産まれた「私」というものの木乃伊
あるいは木乃伊である私そのもの

微笑する母

目には光なく白く濁り
全ての世界を拒絶し受胎する

私の木乃伊を右手にわしづかみ
飛翔の体勢に両腕を広げてそばだち
華奢な顎を突き出して小刻みに頭ふるわせながら
左足を軸に永遠の回転を続ける

母は何度も私を孕み
私に連なる私を産み落とそうと

くるくるくるくる
くるくるくるくる

羊水に眠る私ごと
死んだ私をかき抱き

夜ごと夜ごと
ただひたすらに

引き攀れた産みの果てなき瞬きを舞い続ける